



## 大森啓助の生涯と作品について：《ダンス》《新生平和国家》を中心に

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 金井 紀子   |
| 雑誌名 | 関西学院史紀要   |
| 号   | 25  |
| ページ | 7-38  |
| 発行年 | 2019-03-15  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10236/00027595">http://hdl.handle.net/10236/00027595</a> |

# 大森啓助の生涯と作品について

―《ダンス》《新生平和国家》を中心に―

金井 紀子

はじめに

大森啓助（一八九八―一九八七）は、関西学院出身の洋画家の中では知名度が高く、二〇一八年は生誕一二〇年にあたる。アンティミスト（室内画家）、コロリスト（色彩に秀でた画家）と評され、絵画技法書を翻訳し、エッセイを発表する文筆家でもあった。一九九三年に日動画廊が遺作展を開催して出版した図録（所収年譜）が基本資料となってきた<sup>①</sup>。ただし、生涯についてのまとまった評伝はなく、関西の美術館や博物館には二〇〇三年頃まで作品がほとんど入っておらず、全貌をつかみにくい作家だった。

筆者は神戸市立小磯記念美術館で「関西学院の美術家―知られざる神戸モダニズム―展」（会期：二〇一三年七月二〇日―一〇月六日）を企画担当し、同校で戦前に学んだ美術家一四人の作品約一七〇点を紹介した<sup>②</sup>。大森作品については、房子夫人から神戸市立博物館へ寄贈された一二



図1 大森廻漕店と大森旅館葉書（部分） 神戸市立博物館蔵

点の油彩画が、修復を経て同展で初めて一堂に披露された<sup>③</sup>。ただ図録編集時は主要画家一〇人の年譜編集にエネルギーを割かれ、作家論を掲載できなかった。そのため、本稿では大森について文献資料を見直して整理するとともに、博物館勤務時代に房子氏から聞き取りをさせていただいた記録を加えて彼の軌跡を辿ってみたい。また、敗戦後に一時だけ制作した群像《ダンス》（一九四七）と《新生平和国家》（一九四八）については細部を検証し、意図された表現を考える。

## 生い立ち

大森啓助は本名を多満四郎<sup>たましろう</sup>という。廻漕業を営む父・二代目大森榮介<sup>えいすけ</sup>（一八六六―一九五五）と母・つる（一八六九―一九三四）の間に、七人きょうだいの四男として、一八九八年三月一五日、神戸市神田区（現・中央区）栄町通四丁目四番に生まれた。初代大森榮介（一八三九―一八九七）は岡山の出身で、開港後の神戸の発展を商機と考える船主たちから廻漕問屋の開設を勧誘されて、一八七三年一月に栄町通で廻漕問屋を創業し、大森旅館と併せて営業した（図1）。備前屋と号し、通信逋員や商人が利用する神戸では西村旅館に次ぐ旅館だったとい

う。西南戦争、日清戦争の時は軍人や物資の輸送を請け負い、多満四郎が誕生した頃は大阪の堂島にも支店を持っていた。

『株式会社大森廻漕店 百十年史』には初代の「長男康長が二代目大森栄介を襲名」(二六頁)と記載されているが、実際は旧名を草信多平次(くさのぶたへいじ)という岡山県出身の啓助の父が一八九四年に初代栄介の養子となり、妻つると共に入籍して二代目栄介を名乗った。<sup>(4)</sup>大森廻漕店は一九二一年一月、個人経営から株式会社へ組織変更された。大森家は長男・栄一と二男・憲治が早世したため、株式会社の創立総会時には三男・千代三(ちよぞう)(一八九四—一九三八)が取締役、多満四郎が監査役だった。その後、同社は日中戦争時に輸送取扱物が増大、上海支店を開設した。現在も神戸に拠点を置く港湾運送会社で、荷役・倉庫・通関・輸出入などに携わる。ただし、創業者である大森家は戦中戦後にかけて会社から離れざるを得なかった。

多満四郎は、子供の頃から絵を描くことが好きだった。両親は趣味豊かな人で、小学生の頃より歌舞伎見物に連れられて行き、後に歌舞伎絵を手がける基本的な知識と経験を有した。一九〇四年四月、神戸市立神戸尋常高等小学校尋常科(市立神戸小学校、現在は廃校)へ入学、一九一二年三月に卒業した。同年四月、兵庫県立神戸商業学校(現・県立神戸商業高等学校)へ入学し、一九一六年三月に卒業(三四回生)<sup>(5)</sup>、まずは商家の跡取りとしての教育を受けた。後に創作版画家となる川西英(本名・英雄)も同校の卒業生(三三回生)である。

## 原田の森で

多満四郎は一九一六年四月、関西学院高等学部商科に入学した。入学願書に残る当時の住所は北野町三丁目七番。ハンター坂を登った北側の広大な敷地に屋敷があった（昭和戦前期には洋館と和風の家があったという）。関西学院への進学は、外国語の習得と家業を将来海外へ拡大することへの貢献が期待されたためである。しかし在学中、絵画部・弦月画会（現・弦月会）に参加し、同会で仲間を得て人生が変わった。関西学院学院史編纂室が所蔵する『高等学部商科第五回卒業アルバム』（一九二〇）には、The Art Club（美術部）の写真が掲載されている。学生服の青年達が楽しげに手をつなぎ、二二歳の大森が中央にいる。関西学院が神戸モダニズムにおいて重要な文化的役割を果たした点については、ここでは詳述を避けるが、大森が弦月画会に言及した文章が『関西学院高等商業学部同窓会会報』（以下、同窓会会報と略す）に残る。

「弦月画会は即ち絵画に興味を有する者の集りであつて、荒川（筆者注・清治）氏、片野（筆者注・久治）氏（いずれも第二回卒業）などの人々によつて創立されたものであります」（第二号）<sup>⑦</sup>。

また第一四号では岡本武男、北邨英次に誘われて入部したこと、大森が「学院の弦月会が不届（ふしちやう）にも自分を絵描きにしてしまった」という経緯が紹介されている。同誌に掲載されたエッセイ「エカキの寝言」には「絵を描き出して十五年目」とあり、絵画熱の高まりが一九一八―一九年頃と逆算できる。一九二〇年三月に高等部商科を卒業するが、卒業式も済ませずに上京し、川端画学校で本格的な勉強を始めた。<sup>⑧</sup>卒業後も、関西学院で得た絵画仲間と月徒社というグループをつくり、一九二三年五月に兵庫県の県会議事堂で第一回展を開催した。そのメンバーとして「北村今

三（版画）、北邨英次（洋画）、岡本武男（洋画）、大森ケイスケ（洋画）、詫摩治男（版画）、横井時直（洋画）<sup>(9)</sup>」の略歴を大森が紹介している。雅名のケイスケがここで登場する。

### 金山平三のもとで

一九二〇年代前半、大森は遠縁の金山平三に師事した。金山についての基本文献である飛松實『金山平三』（以下、評伝と略す）と『金山平三画集』によると、一九一七年より金山は毎年厳寒期に信州の下諏訪へ写生旅行に出かけ、定宿の桔梗屋に滞在して制作した。<sup>(10)</sup> 同地には画家たちが集い、南薫造、大久保作次郎、柚木久太、新井 完などとともに大森啓助の名前があげられている。彼らの中では最年少である。評伝では、金山がらく夫人へ送った葉書が紹介されている。例えば一九二二年には「今年は云い合はせたように誰も来ない」、また一九二三年二月には「只今、新井君と昨日三木（筆者注・朋太郎）、大森両君の来諏で四人と相成り賑かに候」とある。評伝の二三九頁に四人が炬燵に集う写真が掲載され、金山はくつろいだ表情を見せる。<sup>(11)</sup> 新井は姫路出身、三木は神戸出身で県立神戸商業学校を中退して川端画学校に学んだ。当時について大森は「まだ画学生の域を脱せぬ三木氏と私は、おそれおののいて片隅に小さくなっていたことを憶いだす」と述べている。<sup>(12)</sup>

一九二四年一月、金山は明治神宮の聖徳記念絵画館へ神戸市が献納する『日清役平壤戦』の制作を依頼された。明治天皇の事績を視覚的に伝える目的で建設が企図された同館を飾る壁画八〇面の画題は一九二二年に確定し、制作者が決められてゆく。神戸市が金山にこの画題で揮毫

を求めた理由は、明治天皇が日清戦争当時、広島の本営に向う途中、神戸にて平壤の陥落を知ったからという。

壁画制作のために本格的な画室が必要となり、金山は現在の東京都新宿区中井に購入済みだった土地一五〇坪に、自らの設計でアトリエ兼自宅を建て、一九二五年四月に転居した。神戸市からの揮毫料七千円のうち二千円を使って九月下旬から取材のため朝鮮を旅行、これに啓助を伴った。金山四一歳、大森二六歳。九月二四日に京城の朝鮮総督府を訪問して打ち合わせをした後、平壤に九月二五日から一〇月一〇日頃まで滞在して取材したという。平壤戦は一八九四年九月一五、一六日のことで、九月に現地取材が可能となる旅行計画だった。季節や天候により空気や風景、色彩がいかに変化するかを熟知した金山の現場主義を感じるが、実際は絵になる場所をなかなか見出せず難しかったようだ。その後、開城、元山、長音寺、京城を経て一〇月二九日に帰神した。

評伝には大森が一〇月一二日に夜行列車の中で急性大腸カタルを発病し、元山府立病院に三日間入院、旅程を変更せざるをえなかった顛末が記されている。この部分は大森のエッセイ「憶いで元山―金山先生追憶―」にほとんどを拠っている。飛松の取材に対しては「翌年に渡欧と決まっていた私に、海外旅行のトレーニングをさせようというご配慮」からお伴を命じられたのに、「先生のご厄介になりどおしであった。嫌な言葉だが、いわゆるボンチ育ちの私の振舞は、四十日近くも起居を共にしただけに、先生のお気に障ったらしい」と語る。気候や条件の厳しい土地で絵を描くためには自己管理、体調管理が何よりも大事だと大森は痛感しただろう。ただ金山はこれ以前にも、一九一八年五月に新井を伴って朝鮮や満州へ写生旅行に赴き、『さびれたる寛城子』

を制作し第二回文展へ無鑑査出品している。金山にとって下諏訪へ自分を慕ってきた同郷の若手洋画家から、一ヶ月以上の朝鮮行き同行者を選択したのは、やはり数少ない気を許せる後輩だったのだ。その後《日清役平壤戦》は完成まで約一〇年を要した。金山は大同江の対岸に平壤市街を望む構図で、長岡外史中佐が馬上で突撃を命じる姿を描いた。戦闘体験者への取材を重ね、納得のゆくまで作品に手を入れた。<sup>(14)</sup>発表が遅々としても気にしないその制作姿勢は、大森に影響を与えたと思われる。

### フランスにおける仲間、奥様はフランス人

一九二六年、二八歳の大森は日本郵船箱根丸に乗り神戸港を二月一八日に出航、三月末にフランスのパリへ到着した。同窓会会報の第一四号では「身体を壊して終い絵の方も一向に延びないので医者勧めで気晴しに欧州にでも旅行に出かけることになりました」と紹介されている。ただ何よりも、金山の奨めがあったからこそ一年以上前から留学を計画し、家族も快く送り出してくれたのである。旅行の免許状は「大森廻漕店監査役」として得たといい、旅券を申請する際に役所で、商科を卒業して美術研究をする自分が気楽な身分と見なされて不愉快な扱いを受けた旨を「エカキの寝言」で述べる。<sup>(15)</sup>大森は繊細な感性を持ち、自らを語るエッセイには複雑な感情が潜む。お金持ちの坊ちゃんのだ楽（事実そういう面もあるのだが）と思われるのが嫌で、時にはバンカラを装い、またある時には軽い文章が読者を混乱させる。芝居気を持ち込む傾向がある。

大森は川端画学校で油彩画を勉強したが、約七年では目立った成果を出せなかった点を苦にし



ていたようだ。しかし、渡仏した年にサロン・ドートンヌへ出品すると初入選した。その小品をイギリス人貴族が高く購入したことで少し自信を得て、「俺も之で身を立ててやろう」と意欲が芽生えた。翌年は同展を落選したが、一九二八年からは再びサロン入選を続け、次第にパリで知られるようになった。

長期間、海外で生活できたのは実家の全面的な支援による。房子氏の回想によると、毎月四百円ほど仕送りがあったという。当初は絵画修業が第一目的でなかったためでもあろう、午前中はフランス語を学習し、午後はクラブに行き各種マナーを学んだ。日本人離れしたエレガントな作法を身につけた。大森に根気よくフランス語を指導した家庭教師の女性は貴族の出身で、洗練された教養と趣味を持ち、オペラ座やフランス座への観劇をはじめ何かと外出に連れ出して弟のように可愛がったという。<sup>(16)</sup>

一九二七年二月頃、パリ日本人会の松尾邦之助（後に読売新聞論説委員となる）から、彼が仏訳した岡本綺堂<sup>きどう</sup>原作の「修禪寺物語」をオデオン座で上演するため、大森は演出を依頼された。<sup>(17)</sup>幼少時より歌舞伎に親しんだ芝居の知識を買われたのである。役者への稽古のため週二回オデオン座に通った。この翻訳劇は「ル・マスク」と改題され、藤田嗣治が舞台装置を担当して背景を描き、柳亮が小道具の考証と作製を担当、六月にテアトル・シャンゼリゼーで五日間興行された。遺作展図録には、大森が一九四八年に回想したエッセイ「パリにおける「修禪寺物語」の演出」が再録され、中山岩太が撮影した「修禪寺物語」関係者の写真が掲載されている。大森はまた、日本の芝居をやるからには「花道」が欲しかったこと、劇場側とつける、つけないでもめた時に鶴の一声で「花道をつけろ！」と言ったのが藤田で、二晩徹夜して舞台の寸法に合わせて伊

豆の夜叉王の住居を造り、背景に富士山を描きあげたその才能と体力、プログラム表紙の巧みなデザインに脱帽したと後に述べている。<sup>(18)</sup>

大森の戦災を免れたアルバム（神戸市立博物館蔵）には一九二七年八月から九月にかけて、サンシール村に滞在した写真がある。この時は、松尾邦之助、伊原宇三郎・由起しげ子夫妻も一緒だったようで、伊原が撮影した啓助とテレーズ・フェルナンド・デロット（Thérèse Fernando Gilot, 一九〇八年生まれ）の姿が仲睦まじい。フェルナンドはモンマルトル出身のパリっ子で、父親は鍵職人だった。さまざまな日本人画家たちのモデルを務めたといい、大森は翌年、彼女と結婚した。サンシール村へは久米正雄、益田義信、宮田重雄、伊藤廉、石黒敬七と旅行した写真も残るが、アルバムには日付や人名がほとんど記入されていない。ただ、神戸ゆかりの画家では角野判治郎が一九二七―三〇年頃に渡欧し、三木朋太郎も一九二七―三一年に、林重義が一九二八―三〇年に、今井朝路も一九二八―三〇年に渡欧するなど留学時期が重なっていた。大森にとつて、同郷の画友との出会いや旅は格別な嬉しさがあつただろう。

アルバムには山田耕柞の写真もある。在仏中、山田からオペラの舞台背景制作の依頼があつたという。<sup>(19)</sup> 竹中郁は、一九二八年に渡仏し、後から追ってきた小磯良平と一九三〇年まで遊学した。竹中は、一九二八年春にパリの国立アリアンス・フランセーズで福島繁太郎と同級生だったこと、彼の家を訪れた際にルオーなどのコレクションを見た<sup>(20)</sup>と述べている。また、福井市郎は一九二五―二八年に、古家新は一九二八―二九年に渡欧した。

一九二八年六月八日、大森は日本人会館で開催された「洋画家大会」に出席した。同年秋、サロン・ドートントヌに《晩夏》と《満潮》を出品して入選したが、大阪朝日新聞神戸附録（一九二八

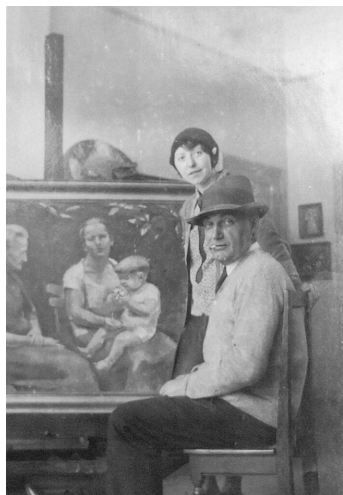


図3 モーリス・アスラン（写真帖より）  
神戸市立博物館蔵



図2 パリのアトリエに座る大森啓助  
（写真帖より） 神戸市立博物館蔵

年一月六日）で紹介された。アトリエの写真（図2）の右上に飾られている樹木・家屋・丘陵を印象派風に描いた作品が《晩夏》である。切抜帖には、《春》《朝の海辺》《海浜》（一九三二）などの滞欧作の写真が残る。

### アスランとブルターニュ

一九二七年秋にパリのベルネーム・ジェンヌ画廊で、大森はユトリロの作品に出会い、ねずみ色の色調で教会を描いた作品に強い印象を受けた。<sup>2)</sup> 在仏中は、特にモーリス・アスラン (Maurice Asselin, 一八八二—一九四七) から絵画の指導を受けた。アスランはキュビズムなどの前衛美術運動とは一線を画した穏健な風景描写を得意とし、日本人留学生に影響を与えた。中村研一も一九二八年

に再渡仏した際、アスランに私淑した。アルバムの中には、アスランとその家族の写真が貼られている（図3）。

後年大森は、南ブルターニュのコンカルノーでアスランと過ごした夏がいかに楽しかったかを回想している。一九二八年または一九二九年と思われるが、アスランが先に同地へ来て啓助のために貸間を探しておいてくれたという。終始行き来し、師の車でカンペールやボンタヴェンを訪れた。当時、多くの画学生がコンカルノー風景を描くため、朝夕突堤にイーゼルを並べていたという。<sup>(23)</sup>

一九二〇年代後半のパリには日本人画家が非常に多く留学し、グループが出来ていた。大森が一九三三年に『美術新論』へ寄稿した「巴里日本美術協会紛争回顧録（一）（二）（三）」と『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録によると、一九二五年一〇月、日本人会の休憩室で第一回在巴里日本美術家展覧会が開催され、翌年一一月に第二回展が開かれた。それをもっと広いところでのことで、一九二八年六月に第一回日本美術大展覧会がルネ・ジヴィー画廊で開催された。その盛況をもって一九二九年三月に巴里日本美術協会が結成され、大森も参加している。薩摩治郎八と福島繁太郎はこの第一回日本美術大展覧会に資金を援助した。しかし、薩摩が藤田をトップに押すことで会員内に亀裂が生じ、薩摩を中心とするグループが巴里日本美術協会から分離し、仏蘭西日本美術協会を結成して展覧会（薩摩展）を開催するなど衝突が生じたという。<sup>(24)</sup>

薩摩治郎八展図録の三〇頁には、「巴里日本美術協会文書 署名会員名簿」（伊原宇三郎遺品）の写真が掲載されている。同年六月一〇日から二二日にかけてパリのオッドベール画廊で開催された「第二回巴里日本美術協会展（福島展）出品目録」の欧文情報も二二五頁に再録され、両者

をつきあわせるとこの第二回展に三一作家による三五点の作品が展示されたことがわかる。<sup>(2)</sup>出品者名は下記のとおりである。

青山義雄、坂東敏雄、坊一雄、海老原喜之助、江崎義郎、長谷川潔、林重義、伊原宇三郎、一木隼二郎、伊藤廉、角野判治郎、勝股武夫、木下義謙、北蓮藏、小池正雄、古城江観、近藤七郎、小柳正、松永安彦、松岡銀六、三浦市太郎、宮田重雄、大森啓助、碓田克巳、坂田一男、鈴木千久馬、鈴木良三、高野正次郎、瀧山源三郎、鶴見守雄、内海正成

うち四名は二点出品、大森は《Beau temps 晴天》と《Brise そよ風》を発表した。

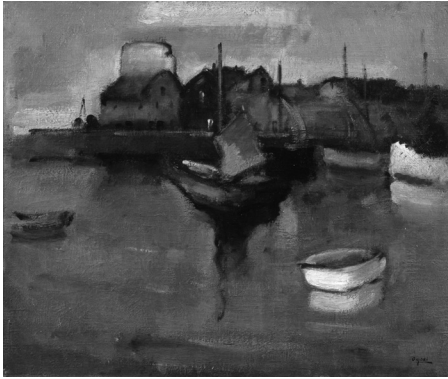


図4 大森啓助《ブルターニュ コンカルノーの港》1929年 油彩・キャンバス  
46.5 × 55.5 cm 神戸市立博物館蔵

現存する初期の作品が《ブルターニュ コンカルノーの港》(図4)である。木梓に「ブルターニュ コンカルノーの港 一九二九 六月 巴里オッドベール画廊出品」と記されている。一九二九年六月といえは第二回巴里日本美術協会展と考えられ、本作は《そよ風》にあたるかも知れない。静かなグレー調の海にヨットを配し、対岸のカラフルな建物を遠望する。強い色彩を用いていないが多彩な色が潜む。金山平三も城塞都市コンカルノーを訪れ《コンカルノーの城壁》(一九二三頃、東京国立近代美術館蔵)などシス

京の親戚宅にあつたため残り、戦後画家の手許に戻った。金山とアスランの影響がうかがえる作品である。

一九二九年七月、関西学院の卒業生・野口彌太郎がパリに到着した。野口は大森の一年後輩にあたり、گران・シヨミエールへ通い、同年秋にブルターニュ、年末にはクロ・ド・カーニユへ旅行した。<sup>(25)</sup> アルバムには一九三〇年一月に野口、木下孝則と彼らの夫人を撮影した写真があり、年初もカーニユで行動を共にしていたと考えられる。

一九三〇年、第三回巴里日本美術協会展（一月一八―三一日）がザック画廊で開催され、一九三一年の第四回展（三月一三―二七日）、一九三三年の第五回展（五月一三―二七日）まで



図5 大森啓助《閑日》  
1929年 油彩・キャンバス  
45.2 × 53.0 cm 神戸市立博物館蔵

レーを思わせる作品を描いた。大森作品の海を大きく取る画面の配分比と構図は、金山作品を想起させる。

現存するもう一点の滞欧作《閑日》（図5）には、木枠に「閑日 一九二九年 於巴里 大森啓助」と書かれている。地面・建物・空の境界が判然としない抽象味がかった風景画で、画面左下に数羽の鶏が描かれている。画面はグレー、ベージュ、ブルーの色調でまとめられ、眠気を誘う雰囲気タイトルと調和する。滞欧作は空襲でほとんど焼失したが、この二点は東

続いた。いづれにも大森は作品を発表した。

しかし、一九三〇年頃から急速に日本人留学生が帰国する。世界的不況により日本円が暴落したため、大森夫妻もパリ生活が苦しくなり、一九三二年に日本へ戻った。七年間の滞欧中にスペイン、イタリア、ベルギー、オランダ、ドイツなどを夫婦で巡った。本人は、フランスへ行つて初めて生活面で自立したと語ったという。仕事の理解者で公私ともに良きパートナーとなる妻を得て、フランス語も上達し、充実した日々を送った。後に友人の一本隼二郎は、大森が外国人でありながら夫人のおかげでフランス人の生活圏で暮らし、研究できた点が、日本人にはそういう機会が少ないため羨ましいと述べた。<sup>(26)</sup>大森は帰国後、恩師からかつて伝受されたという「渡仏者心得八ヶ条」を紹介している。<sup>(27)</sup>

## 滞欧作の発表

啓助とフェルナンドは、神戸・北野町の実家に一時住んだ。両親は、夫人を「フェルさん」から満ちるという意味で「満壽子さん」と呼んで歓迎した。

同年、第一〇回春陽会（一九三二年四月二十四日―五月一日、東京府美術館）に滞欧作を発表した。日本美術年鑑に再録された出品目録を見直した時、大森啓助の名前はなかった。ただし、《木立の間の家》《エクス東郊》《樹蔭》《黒い城の森にて》《山頂断崖》《サンシャマの時計台》《黒い城のサントヴィクトワール山》を出品した大森商二という画家があり、別の名前を用いたと推測できた。なぜ別名で発表したかについては理由が三つ考えられる。一つは恩師の金山平三がかつ

て四年間ヨーロッパに留学したものの、帰国後に滞欧作を発表する展覧会を病気もあつて断念しており、大森も自信のある心境ではなかったこと、もう一つは商科出身を意識し、実家の会社をもじって大森商事と同音異語の雅名で出した洒落っ気、最後は在仏中に日本人美術家同士の争いがあつたため、逆恨みを警戒して安全策をとった可能性である。出品作は南仏のエクス・アン・プロヴァンスやセザンヌの作品に登場するサントヴィクトワール山を題材とした風景画が含まれていたようだ。

一九三三年の第一一回春陽展には大森啓助の名前で《室内》を発表した。春陽会賞を受賞し、会友に推挙された。同年秋、大森はパリにおける日本人画家華やかなりし頃の思い出を先述の「巴里日本美術協会紛争回顧録（一）（二）（三）」として執筆した。これに対して柳亮は外国で展覧会をする意義と事務の大変さを訴え、大森が面白おかしく人間模様を書いた点を許しがたいと反論した。<sup>(28)</sup>大森の方は堅苦しい原稿は芸がないと考えたのだろう、それで同窓会会報のように軽妙に書いて、反感を買ってしまったようだ。

この頃、大森夫妻は上京し、東京都渋谷区金王五九番に父親が建ててくれたアトリエで制作に励むようになる。上京の時期については、今まで一九三二年とされてきたが、大森が一九三三年に神戸みなどの祭など、比較的故郷で仕事をしているため少し遅かった可能性がある。<sup>(29)</sup>角野判治郎、林重義、三木朋太郎なども出品した兵庫県美術家聯盟展に、大森は同年の第五、六回展だけ出品しているのである。一九三三年の師走、妹・さよ（一九〇九―一九三三）が幼い娘を残して二四歳の若さで病死した。翌年の八月、母・つるが六五歳で他界した。

美術雑誌での執筆がこの頃より増えた。マックス・ヤコブのルノアール論の翻訳を『美術』



(一九三三年二月号)に、マチスの作品論を『みづゑ』(一九三四年六月号)に、またフランスの展覧会制度について論じた文章を『みづゑ』(一九三五年八月号)に寄せた。

一九三五年二月、日動画廊で「大森啓助滞仏作品展」を開催し、四〇数点を披露した。パリ時代からの友人である益田義信は、同展の出品作について「和やかな落着いた而もほのぼのと明るい空気を感ずる」と評し、「詮索に詮索を重ね、自分の仕事を余り知り過ぎて懷疑的に成つて了う彼が仕事の上で積極的に成つたのは慶賀す可きである」と性格を見抜いた言葉を贈つた<sup>(30)</sup>。一九三五年は、美術界は帝展改組で大きく揺れた。制度に不満を抱いた金山平三や新井完は中央画壇から離れた。大森自身は、国画会へ発表の場を移した。

一九三六年、パリ時代の仲間で裕福な家庭出身の佐分眞が、同い年の三九歳で自死する。これは大きな打撃だったと思われる。この年、大森は夫人と再渡欧し、翌年帰国する。二度目の渡欧の際、モロー・ヴォチエー著『絵画』の原書を入手した。一時、前衛絵画に関心を寄せたが、すぐに具象絵画に戻った。

## 戦中・戦後

一九四一年の正月から九月まで、大森は『La Peinture』(C.H.Moreau-Vauthier)を翻訳する仕事に集中している。原書は一九三七年にアシェット書房から出た改定第三版で、購入後しばらく置いていたものの、伊原宇三郎の言葉をきっかけに油彩技術の科学的知識の重要性を再認識して読み、感動して翻訳する契約を結んだという<sup>(31)</sup>。また、人名や絵具の色について用語が統一され

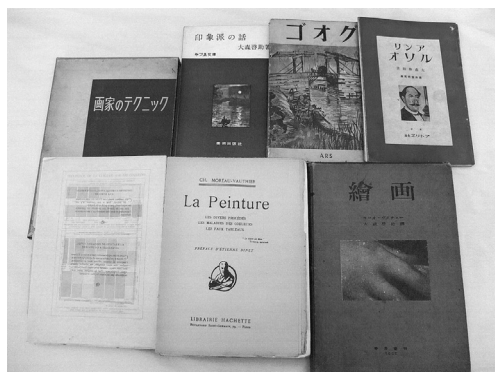


図6 大森啓助の著作と翻訳書 神戸市立博物館蔵  
(上段左よりジャン・ガブリエル・グーリナ『画家のテクニク』翻訳書1951年、『印象派の話』1952年、『ゴッホ』1949年、『アンリ・ルソオ』1940年、下段左よりモロオ・ヴォチエー『La Peinture』(見開き)と翻訳書『絵画』1942年)

ておらず、画家の名前も日本では英語よみとフランス語よみが混在する点を指摘し、美術用語だけでなく統一されてしかるべきではないかと論じた。翻訳書は、一九四二年に春鳥会(後の美術出版社)から出版された(図6)。大森が手元に残した翻訳書には、びっしりと「てにをは」が直されている。出版されても文章が気に入らず、どこまでも校正してしまいう性格だったようだ。

一九四三年、第六回新文展には『金魚』を無鑑査出品した。この年、博物館学について『新美術』に執筆した。<sup>(32)</sup> 人類の文化遺産をヨーロッパではどのように蒐集保管してきたかを紹介し、展示スペースや収蔵品研究、普及についても言及している。印象派の作家や絵画論だけでなく、当時さ

まざまな対象に興味を抱き、執筆していた。

一九四五年五月二五日、渋谷の大森アトリエは、山手大空襲と言われる最後の東京大空襲で全焼した。戦前から描き溜めた作品と蒐集品をすべて失った。戦争が終わったら展覧会を開くつもりで額縁も用意していたといい、すぐには復活できないほど落胆した。フェルナンド夫人も、外国人として戦時下の東京で暮らす苦労が多々あった。また敗戦後はフランス大使館の仕事をして、生活が厳しい時期に食料を運び、啓助を支えた。フランス語の出張授業の仕事も続け

ていた。大森は焼け跡にプレハブ住宅を建て、絵画教室を開いた。これは建築家・前川國男と東大教授・小野薫の共同設計をもとに山陰工業株式会社が製作した組立家屋プレモスで、日本におけるプレハブ住宅第一号だったという<sup>(33)</sup>。大森は仮設住宅の我が家をバラックと呼び、傍らに花を植えて大切に育てた。

歌舞伎絵を手がけるようになったのは、敗戦後、経済的に一番窮迫した時期に大阪で開いた個展で《助六》を出品したのが最初だった。もともと画学生時代から木挽町や二長町に出かけて歌舞伎のスケッチをしていたといい、《助六》が個展で好評だったので描くようになった。しかし、金山平三が焼け跡のバラックに来て自分の芝居絵を見たこと、その後に「金山平三芝居絵展」を鑑賞して圧倒されてしまい、以後はあまり制作しなくなったという<sup>(34)</sup>。ここにも金山の眼を意識した行動がうかがえる。だが、作品として人気があったので大森は一九六七年、六九年、七〇年、七一年、七五年に歌舞伎絵展を開催した。最後まで手元に置いた芝居絵は、西宮市大谷記念美術館に寄贈された。

戦中戦後にかけて実家と大森廻漕店の関係も変化した。二代目榮介には成人した男子が三人おり、トアロードを闊歩する眉目秀麗な大森三兄弟として有名だった。しかし、一九三〇年一二月、兄・千代三<sup>ちよぞう</sup>が社長に就任するものの一九三八年に病死し、その後を啓助<sup>ひろこ</sup>の五歳下の弟・博五郎<sup>ひろごろう</sup>（一九〇三—一九四五）が継ぐが召集されて戦地へ赴き、敗戦直前に戦死した。戦争中は番頭が社長代行をつとめ、敗戦後、大森廻漕店はGHQに接収される。接収が解除された時、会社が大森家の直系が戻る場所はなかった。



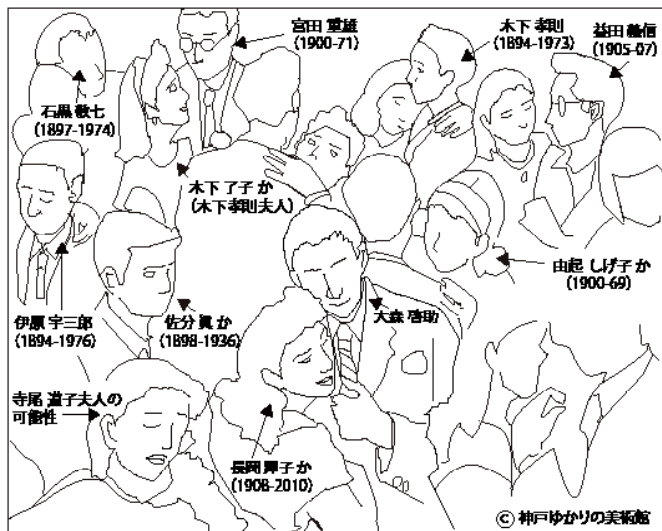
図7 大森啓助《ダンス》  
1947年 油彩・キャンバス 90.7×116.7cm  
神戸市立博物館蔵

## 《ダンス》の正体

三〇人以上の人々を五〇号の画面全体に描き込んだ《ダンス》(図7)は、第一回美術団体連合展(一九四七年六月一〇―三〇日、東京都美術館、主催・毎日新聞社)に出品された<sup>(35)</sup>。この年、四月一日に学校教育法が、五月三日には日本国憲法が施行され、市井の人々の暮しが大きく変わった。本作は、人々が精一杯着飾ってダンスに興じる様子をとらえた、戦争が終わって娯楽を享受できる喜びにあふれた風俗画に見える。

画面中央の黄色い上着にストライプのネクタイを締めて、胸ポケットにチーフを挿した男性は大森本人である。眼下の窪み、通った鼻筋、頬から口許にかけての影からわかる。赤いドレスを着た相手の女性は髪にパーマネントをあて、頬を紅潮させ楽しそうだ。画面右下は、茶色の背広を着た男性と白い襟がついた緑の衣装の女性。大森の左隣の女性は白椿の花を髪に飾り、繊細な顔立ちの男性の肩に手を添える。彼の後ろはヘアバンドで髪をまとめた白と赤の服を着た女性が、茶色の背広に緑色のネクタイを締めた丸眼鏡の男性と組む。

図8 《ダンス》 図解



大森の後方、グレーの服の男性は背を向け、相方の女性は彼の右肩に手を添えている。彼らの右後方は小柄な横向きの男性と、その胸元へ顔を寄せる女性がいる。さらに右のカツプルも眼鏡をかけた男性が左を向き、山吹色のドレスを着た女性をエスコートする。彼女の手前に、藤色のヘアバンドした女性が、節目がちに踊っている。センターに位置する大森から離れるに従い、人物の表情や衣服はほかすように描かれている。女性たちは周縁部でも口紅・頬紅・マニキュアが強調されて華やかだ。

これは、どこかのダンスホールに取材されたものだろうか。ところが、具体的な場所を連想させるものは何も描かれておらず、人間も詰まりすぎている。一方、繰り返し眺めているうちに、踊る人々が大森と親しかった人々の風貌と重なった(図8)。大森と踊る赤いドレスの女性は、広い額と長い鼻梁が

ら、文学座で活躍した女優の長岡輝子が思い浮かぶ。長岡は東洋英和女学院を卒業後、一九二八年に渡仏しパリで二年間、演劇修業した。当時から交流があった。画面左上の丸顔の男性は柔道家の石黒敬七、左端中央の男性は伊原宇三郎と考えられる。繊細な顔立ちの若者は佐分眞（伊藤廉の可能性もある）。画面左上の丸眼鏡をかけた男性は、細長い顔、額の皺、鼻の形が特徴的で、医師であり洋画家だった宮田重雄である。一九二七年にパリに来てパスツール研究所で血清を研究した宮田とは終生交流を続けた。画面右上の眼鏡をかけた男性は益田義信、その左、すっきりとした横顔を左へ向けているのは、女性を描き続けた木下孝則と思われる。大森の背後で節目がちにしている女性は、音楽家で後年作家となる由起しげ子だろうか。このように《ダンス》は敗戦後の日本の娯楽場を活写した風俗画を装いながら、華やかなパリ時代の交遊録が再現されているのである。石黒と宮田の間にいる女性がアルバムに残る木下了子の横顔に似ており、画面左下の女性は寺尾道子夫人と記された写真と雰囲気に近いことも併せて指摘しておきたい。滞欧作を戦争で失っても友人は残った。人生の半ばを迎えた大森は、人々の顔を慈しむように描いた。《ダンス》は戦災からのリハビリであり、過去を総括する群像だった。

### 《新生平和国家》の役割

第二回美術団体連合展（一九四八年五月二五日―六月一六日、東京都美術館、主催…毎日新聞社）に出品した《新生平和国家》（図9）は百号、現存する最大級の作品である。母子・楽器を奏でる女性・スポーツ選手・科学者・画家など一三人が描かれている。題名から戦後日本の復興



図9 大森啓助《新生平和国家》 1948年 油彩・キャンバス 130.4×162.1 cm  
神戸市立博物館蔵



図10 《新生平和国家》図解

を意識した内容とわかる。目を惹くのは中央に大きく描かれた母子像である。《室内》《ギタリス》にも描かれた薄緑色の藤椅子に座る女性は、白いキトン風の衣装を着て赤ん坊を抱いている。ピカソの新古典主義時代の女性像を思わせ、新たな国を担うのは新しく生まれた子供だと主張する。子の健やかな育ちと、平和な世の中であれとの願いが感じられる(図10)。

マンドリンを奏する赤いドレスの女性は母子をのぞき込む。赤と白の衣、立像と座像の対比が

鮮やかだ。彼女の右下には山吹色のドレスを着た女性が座り、書物を膝にのせペンを持つ。知的な作業に従事する学問の女神のようである。画面右端には裸の男性が二人描かれている。奥の若者は右手に棒を持つ。彼の背後には馬が二頭描かれ、海には帆船が浮かび、火山が噴煙をあげる。右下の男性は円盤を投げる人のポーズ、ローマ彫刻を思わせる。これらの男性像は、健康な若者が戦争に行かなくてすみ、スポーツを楽しめる世の中であることを示している。足元に二羽の白い鳩が描かれ、白い犬が寄り添う。ペンを持つ女性の眼差しの先に、青い球体と向き合う男児がいる。球体には赤い線がある。これを地球儀と見なせば、無垢な子供が世界を知ろうとしている姿に思える。男児の左隣は成長した少年で、マントを羽織り、スケッチブックを抱える姿は小さな芸術家のような。少年の顔は見えないが、画面中央の赤ん坊を眺めている。

画面左下には女性が二人描かれている。横たわる女性はヌード、その右上の紫のドレスを着た女性は鏡を見ながら髪を整えている。この二人は日常生活からかけ離れた姿で、ギリシア神話に登場する美の女神ヴィーナスなどを連想させ、西洋美術史の象徴と考えられる。彼女たちの背後では、白衣の科学者が顕微鏡をのぞいている。黒い服を着た女性が歌い、画面左上に大学のような建物が描かれている。学問の府の前にイーゼルを立ててキャンバスを置き、絵を描く白いシャツを着た男性は大森本人である。背後には虹が二重にかかり、前途を祝福している。母子像には早世した妹・さよ、若者二人には兄弟の千代三と博五郎の姿をあてはめた可能性も考えられる。黒服の女性はレクイエム（鎮魂歌）を歌っているのかも知れない。

《新生平和国家》の左側半分で、大森は西洋美術史には神話や寓意などの伝統が基礎にあり、そのうえで科学的な研究を行い、自らは絵画を描くのだという役割を宣言している。音楽・学問・





図11 大森啓助《洋裁店》1949年  
油彩・キャンバス 116.7×91.0cm  
神戸市立博物館蔵 第23回国展

スポーツは絵画に養分を与える。この群像は、自己と絵画を巡る未来へ向けての歴史画が意図されているのである。かつて師の金山平三が明治の歴史画《日清役平壤戦》を手がけ、下諏訪に集った画家たちも制作に携わった聖徳絵画記念館の壁画を大森は忘れておらず、敗戦後の昭和の歴史画を、自分ならこう描いてみたいと構成したのではないだろうか。一九四七、四八年にだけ出現した群像作品は、たとえ人物の表現に少し未消化の部分があるにせよ、連合展に選拔された意識を持って、大森がそれまでにない挑戦として、ブラック・アトリエで、自らの過去と未来を投入して描いた歴史画という異色作だった。

## サロンと色彩―円熟期の活動

《洋裁店》(図11)は新たな構図に挑戦した作品である。店内にミシン、椅子、マネキン、ハンガーがぎっしりと詰め込まれている。ブラックの作品を思わせる上部から俯瞰する視点で椅子の座面を捉え、物を積み重ねて奥行きを生み出す。画中のT・Bはテイラーを表す。洋服の仕立ては、敗戦後に食べてゆくための重要な仕事で、色使いから明るくモダンな

感覚が伝わる。しかし、この部屋は室内なのか屋外なのか。扉を開けて洋裁店内をのぞいているつもりが、上部に描かれた縞模様の日よけと背景に描かれた窓に気付いた時、どこにもない空間が突如として出現する。本作については、かつて巴里展がらみで美術雑誌上で大森に反論した柳亮が「モダニズムへの内気な接近がこの作家の持ち味と無理なく融和して自然な効果を作り上げて居る、色彩もめずらしく愛撫的でこの人としては近來の収穫」と評価した<sup>(36)</sup>。同年の第三回連合展に出品した《台所》と一九五〇年の国画会に出品した《浴後》も、室内に物を詰め込んで人物を配した構図だったが、それらには力みがあった。

一九五一年、大森は戦争中も苦勞を共にしたフェルナンドと離婚した。神戸に住む父の依頼で、夫を亡くした姉・壽美<sup>すみ</sup>（二八九七―一九七三）を引きとったことが理由のひとつだったといい、フェルナンドは親戚のいるアメリカへ渡った。二代目榮介には七人の子供がいたが、戦後も生きたのは壽美と啓助だけで、彼は先代から引き継いだ廻漕店を手放し、一九五五年の師走に八九歳の生涯を閉じた。

一九五〇年代から七〇年代にかけて、大森は国画会へ毎年発表を続けた。自宅では複数のグループに絵画を教え、丁寧で紳士的な指導は人気があり、サロンのようだったという。絵画教室のひとつは土日を中心に女性も男性も参加した「きんぼうげ塾」で、一九六〇年前後は、毎年銀座の風月堂で発表会を開催していた。

パリ時代からの友人たちとは、二〇年以上交友が続いた。モンパル会と称し、画家とその家族がレストランや家で親睦会を開き、写生旅行を行うこともあった。伊原宇三郎は、この会合が少なくとも百回以上続いており「集まれば唯もう他愛なくゲラゲラと笑い、酒ヌキでうまいものを



図 12 大森啓助《夏山》  
1967年 油彩・キャンバス 91.0×116.8cm  
神戸市立博物館蔵 第41回国展

食べるだけであるから、出ねば損みたいないな底ぬけに明るい会（略）私などのようにそういう派手さの足りぬ者にとつては結構日光浴位の保養」と楽しいグループの様子を紹介する。大森の歌舞伎芸は宴会の定番だった。<sup>(47)</sup>一九六八年にはギャリリ・アルカンシエルでモンパル会のグループ展を開催した。大森が戦後、神戸に戻らなかったのは、東京での人間関係の方が、はるかに豊かだったからだ。

《夏山》（図12）は一九六七年に国画会へ出品した晩年の代表作である。微妙に異なる複数の緑色を使い分けて山の量感を捉えている。前景の樹木は形態が単純化され、画面右下の一定のリズムで引かれた縦線は木立を連想させる。空はどこまでも碧く、白い雲が流れる。信州の山に取材した本作は、色彩と筆のタッチだけで量感と遠近感を表現しており、省略を生かした大森の画業のひとつの到着点を示している。

風景画では、房総半島に取材した波の絵をししばは制作した。静物画では貝や壺、また泳ぐ鯉や金魚を題材にした。最も好んだ題材はミモザ、パンジー、薔薇、アジサイ、ジャーマン・アイリスなどの花だった。大森作品は一見地味だが、色彩がさらさらと輝いて、透明感があり、絵を見る楽しさを味わえる。これは絵画技法書を翻訳するこ

となどで独自に研究を続けて得た、工夫された色使いである。

七三歳のとき、取材で絵を描く時に何を大切にしているか問われた大森は、「決して他人の真似をしないことです。(略) 絵には性格がそのまま表われ、嘘のないものです。(略) 右を向き、左を向いたりしていると、結局一生自分の絵、独自の仕事ができずに終わってしまう。(略) 現代に生きているかぎり(略) 他の芸術や社会にも目を開き、栄養を吸収することが必要です。時流に流されず、しかも現代感覚を身につける」精神を持たなければならないと答えた。<sup>(38)</sup> また、対象の本質を見きわめることを重視した。

一九七一年、神戸・三宮のイマイ画廊で「油絵四人展」が開催され、金山平三・新井完、三木朋太郎、大森啓助の作品が並んだ。これは、下諏訪での修業時代の写真から店主の今井徳七が企画した師弟の競演展であった。一九七六年には兵庫県立近代美術館で開催された「兵庫の美術家 県内洋画壇回顧展」に《リング園》と《憩》を出品した。しかし、一九七四年頃より体調不良のため何度も入院するようになっていた。一九七九年まで国画会へ発表し、太陽展には一九八二年まで出品を続けたが、一九八七年三月三十一日に八九歳で亡くなった。

## まとめ

大森啓助は明治・大正期に神戸で発展した海運業の家に生まれ、関西学院で神戸モダニズムに育まれた。実家の恵まれた経済力を背景に合計八十九年間の留学生活を送り、国際結婚により多彩な文化背景を学んだ。ただし彼は「商科出のエカキ」として、自分には美術学校での正規の教

育が欠落し、基礎が足りないことを認識していた。留学で多くのものを吸収したとはいえ、言わば肩の後ろに金山平三の眼があることを意識して生き、自己批判的になりがちで、回顧展の誘いを断るなど重要な時に逡巡した。アカデミズムにも前衛芸術にも没入できないが、ボナールに心を寄せ、誠実に制作を続けた具象作家だった。そして、翻訳仕事を通じて油彩の技法を探索し、『夏山』のような作品に結実させた。多くの著作により、さまざまな記録を残した。

時に芝居気を出す、エレガントで自然な振る舞いは、多くの人々を魅了した。画廊とのつきあいを大切にし、画家仲間にも恵まれ、弟子たちに人気があった。しかし、美術家としての葛藤は、他者にどこまで理解されたのだろうか。一九六〇年代以降は、かつて欧州に留学したというだけでは文化人の役割が果たせなくなり、一九七〇年代以降は次第に執筆の依頼も減った。ある意味それは仕方がなかっただろう。

國松房子氏（一九二九―）は東京出身で日本銀行に長く勤め、同行の絵画部で絵を描いていた。指導者を探していた時に、大阪フォルム画廊の紹介で大森啓助と出会い、画家の最晩年を支えた。神戸市立博物館へ作品寄贈の打診があった時、スナップ写真が添えられていたが、これらは房子氏が大森作品を整理し、日動画廊が撮影したものだった。

大森啓助は作品を売って生活していたが、大事な作品は手放さなかった。戦後は神戸や母校とやや疎遠になっていたが、代表的な作品が故郷に戻り、展示される機会が少しずつ増えている。関西学院では重要作家の位置付けがなされたと思う。同校を卒業し、美術家として生き抜いている中で、大森は地道な勉強を続け、自己の表現を求めた。その道は、孤独で険しいものであった。本稿では生涯と題して彼の足跡を辿ったが、作品・著作・交友関係については今後更なる調査研

究を必要とする。作品に関しては一部の言及にとどまったが、研究の一助となれば幸いである。

(神戸ゆかりの美術館学芸員)

\*本稿は関西学院の美術家展の関連講座「神原浩と大森啓助、人と作品」(二〇一三年八月一日)の内容をもとに、加筆した。まとめるにあたり、大森房子氏、関西学院学院史編纂室、神戸市立博物館、坂東はるな氏(神戸ゆかりの美術館学芸補助・グラフィック作製)のご協力を得ました。ここに記して深く感謝いたします。

【注】

(1) 『大森啓助遺作展』図録 一九九三年 日動画廊

(2) 『関西学院の美術家』知られざる神戸モダンズム』展図録 二〇一三年 神戸市立小磯記念美術館 この展覧会は関西学院創立一二五周年記念事業のプレイベントの一つに加えられ学院側からさまざまな協力と助成を得た。修復費用の一部は大森房子氏が負担された。

神戸市立博物館へは二〇〇三年度に《プルーターニユコンカルノーの港》(一九二九)《ダンス》(一九四七)《新生平和国家》(一九四八)《洋裁店》(一九四九)《ギタリスト》(一九五七)《魚の静物》(一九五八)《潮騒》の油彩画七点、二〇〇四年度に《閑日》(一九二九)《休息》(一九三六)《室内》(一九五一)《母と子》(一九五三)《夏山》(一九六七)の油彩画五点と、著作・アルバムなどの文献資料が寄贈された。

本稿では、第一、二回美術団体連合展の出品目録に則り、《ダンス》《新生平和国家》と表記する。  
(3) 金井紀子「『関西学院の美術家展』ができるまで」『学院史編纂室便り』第三七号 二〇一三年六月二〇日発行

- (4) 大橋俊吾編『株式会社大森廻漕店創業百年史』一九八六年 株式会社大森廻漕店、株式会社大森廻漕店ホームページ「会社概要」を参照。大森家については除籍謄本で確認。
- (5) 『県商の歴史』二〇〇六年（財）神商同窓会 によると楠町七丁目に学舎があった。三三回生は八九名、三四回生は九七名。
- (6) 金井紀子「川西英の人と作品について―帳簿と神戸モダニズム―」『川西英と川上澄生―ふたりが愛した異国情緒―』展図録 二〇一五年 鹿沼市立川上澄生美術館
- (7) 大森ケイスケ「関西学院が生んだ美術家団体「月徒社」」『関西学院高等商業学部同窓会会報』第二号 一九二五年三月三〇日発行 四四～四八頁  
弦月会は、『関西学院大学 絵画部弦月会 創立一〇〇周年記念誌 一九一三―二〇一六』を二〇一六年に発行するなど近年記録編集に熱心である。
- (8) 大森啓助「エカキの寝言」『関西学院高等商業学部同窓会会報』第一四号 一九三三年七月一三日発行 五～一六頁
- (9) 前掲7
- (10) 大塚信雄編『金山平三画集』一九七六年 日動出版部  
『没後三〇年 金山平三展』図録 一九九四年 兵庫県立近代美術館、『日本の印象派 金山平三』展図録 二〇一二年 兵庫県立美術館・ひろしま美術館を参照。
- (11) 飛松實『金山平三』一九七五年 日動出版部 二三八～二三九頁、二五八頁、二六四～二七二頁
- (12) 大森啓助「近況」『繪』一九七一年六月号 日動画廊 一二頁
- (13) 大森啓助「憶いでの元山―金山先生追憶―」『繪』一九六九年八月号 日動画廊 二四～二五頁
- (14) 『聖徳絵画記念館オフィシャルガイド』二〇一六年 東京書籍 一〇一頁
- (15) 前掲8

- (16) 大森啓助「心に残る女の粧い―パリジェンヌの思出―」『おんなのえほん』第一巻 一九五〇年一〇月二〇日発行 一〇六―一〇九頁
- (17) 大森啓助「パリにおける「修禪寺物語」の演出」『春の芸能』一九四八年 毎日新聞社
- (18) 大森啓助「フジタ画伯」毎日新聞夕刊 一九六八年九月三〇日
- (19) 「画家を訪ねて濡れた色彩に異彩 国画会 大森啓助画伯」『光亜新報』一九六二年五月第四週号
- (20) 竹中 郁「ルオー、この一徹」『木』一九七九年一月『消えゆく幻燈』一九八五年 編集工房ノアに再録
- (21) 「日本人のユトリロー」読売新聞 一九七八年一〇月二日
- (22) 大森啓助「コンカルノオ」『美術手帖』一九五五年一月号 五〇―五一頁
- (23) 大森啓助「巴里日本美術協会紛争回顧録(一)(二)(三)」『美術新論』一九三三年八月号 七四―七八頁、九月号 五四―六〇頁、十月号 五〇―五五頁
- (24) 『薩摩治郎八と巴里の日本人画家たち』展図録 一九九八―九九九年 徳島県立近代美術館ほか
- (25) 『野口彌太郎画集』一九八三年 日動出版部
- (26) 一木隴二郎「大森啓助滞仏作品展」『みづゑ』一九三五年三月号 三五―三六頁
- (27) 大森啓助「渡仏者心得八ヶ条」『美術』一九三三年二月号 二六―二八頁  
「巴里は研究の好適所なり」「巴里は倫落の都なり(酒と女に注意)」「語学を勉強せよ」「身体  
健康について(栄養をとり無理をせず)」「友人を多く持つべからず」「貨幣の単位を考えよ」「生  
活の方法(節約せよ)」「仏人の態度は美に立派なり(礼儀正しい)」である。
- (28) 柳 亮「巴里日本美術協会紛争の責任当事者として 大森啓助君への公開状」『美術』一九三三  
年一月号 一二―一五頁
- (29) 『美術と文芸―関西学院が生んだ作家たち―』展図録 二〇一八年 関西学院大学博物館
- (30) 益田義信「展覧会批評 大森啓助氏個展」『みづゑ』一九三五年三月号 三五頁



- (31) 大森啓助「『絵画』の翻訳について」『新美術』一九四二年二月号 四一～四四頁
- (32) 大森啓助「ミウゼオグラフィ―博物館字（一）（二）」『新美術』一九四三年四月号 一七～二六頁、五月号 二四～三一頁
- (33) 「住居の表情写真③プレモス」『生活文化』一九四八年一月一日発行 旺文社  
掲載写真が大森邸といい、第一号は房子氏の回想による。
- (34) 大森啓助「おかるの懷紙」『金山平三全芝居絵』展図録 一九七一年 朝日新聞東京本社企画部
- (35) 美術団体連合展は一水会・二科会・独立美術協会・光風会・国画会・春陽会・新制作派協会・東光会・旺玄会・創元会・現実会・自由美術家協会が参加し、戦後の在野の日本洋画が終結した展覧会。  
第二回展より美術文化協会、第三回展より第二紀会・行動美術協会も参加した。
- (36) 柳 亮「闘志の復活と前衛様式の流行―春の展覧会総評―」『みづゑ』第五二三号 一九四九年六月三日発行
- (37) 伊原宇三郎「モンパル会 底抜け楽天的に家族的に」一九五五年六月一二日 東京新聞
- (38) 「時流を追わず棹ささず 国画会会員 大森啓助氏」『月刊ビジョン』一九七一年一〇月号 六四頁

本書の写真図表を無断で転載・複製することを禁じます。